

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03060

研究課題名（和文）漢籍書き入れの日本中世史史料としての活用をめぐる研究

研究課題名（英文）Study on utilizing annotations written on Chinese classics as materials for Japanese medieval history

研究代表者

川本 慎自（Kawamoto, Shinji）

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：30323661

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本国内に現存する漢籍において本文以外に書き入れられた墨書についての調査を行い、とくに中世に遡るものについて、日本中世史の史料として用いることを考察して史料学的に位置つけた。さらに、これらの史料に見える禅宗寺院の漢籍講義の様相を考察した結果、そこで行われていた知識伝達は漢詩文の知識にとどまらず、幕府財政の先例などの政治・社会経済上の知識、数学や建築意匠などの科学技術上の知識に及んでいたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

漢籍書き入れのなかに室町・戦国期に遡りうるものがあることは、すでに書誌学の研究で検討がなされているが、これを日本中世の禅宗寺院における漢籍講義での知識伝達という視点から着目することにより、そこに含まれる様々な実用的知識を検出して中世社会との関連を明らかにすることが可能になった。日本中世史の史料として古文書・古記録に加えて漢籍書き入れをも活用する途を開いたという点で学術的意義を有するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：We have conducted a survey of ink inscriptions added outside the main text of Chinese books still extant in Japan, and have considered the possibility of using them as historical documents for the history of medieval Japan, especially those dating back to the Middle Ages, and have placed them in a historiographical perspective. Furthermore, by examining the aspects of lectures on Chinese books at Zen temples as seen in these materials, it was clarified that the transmission of knowledge was not limited to knowledge of Chinese poetry and prose, but also included political and socioeconomic knowledge such as precedents for shogunate finances, and scientific and technological knowledge such as mathematics and architectural design.

研究分野：日本史学

キーワード：日本中世史 学問史 禅宗史 五山文学

1. 研究開始当初の背景

日本国内に現存する漢籍には、版本・写本を問わず、本文に加えて様々な書き入れをもった書物が多く存在しており、古写本や宋元版、五山版などの古版本のなかには、室町・戦国期に記された書き入れであることが確認できるものも多い。これらの漢籍書き入れは、禅宗寺院や博士家清原氏などで盛んに行われた漢籍講義に基づくものであることが指摘されており、講義内容の口述筆記たる「抄物」となっており、中世の講義の場における知識伝達の内容を示す史料となる。

本研究代表者はこれまで「抄物」を対象として、こうした漢籍講義の知識伝達で単に中国古典の解釈にとどまらず日本中世における政治・経済・文化のさまざまな社会状況を反映していることを検討してきたが、この漢籍書き入れもおなじく中世人の関心のあり方を示しており、紙背文書とも比肩しうる新たな中世史料としての可能性をもっていると考えに至ったものである。

しかし、この「漢籍書き入れ」は、日本中世史研究においてはこれまでほとんど注目されることはなかった。もちろん書誌学・学問史研究のなかで、奥書識語に準ずる、書物の伝来過程を示す補助的な徴証として用いられることはあったが、日本史の研究として書き入れの内容そのものを史料として活用しようという試みはほとんどなされていない。そして、中国史・中国文学の側の関心は基本的には漢籍本文にあり、後世の日本における解釈に過ぎない書き入れは副次的な扱いでしかなかった。「漢籍書き入れ」は日中双方の研究の「はざま」に置かれていたのである。

2. 研究の目的

前項の背景を踏まえて、本研究の申請時における当初の研究目的としては、日本国内に現存する「漢籍書き入れ」を調査するとともにそのあり方を史料学的に検討し、とくに日本中世史の史料として活用する方法を確立しようとするものであった。

とくに、「漢籍書き入れ」を史料学的に位置づけるということにも重点を置き、単に書き入れの全文を翻刻して史料紹介やデータベース化することにとどまらず、副次的に得られる非文字情報を含んだ、古文書学の様式論に相当するような検討を加えることも試みた。

このことは、室町・戦国期においてどのような知識が必要とされ、どのような知識が伝達されていたかの総体を研究することにつながると考えられる。前述のように、漢籍講義は単なる中国古典の知識のみならず、受講者の関心に応じた様々な日本中世社会の知識が含まれていることが想定されており、古文書・古記録に記録されない中世人の日常生活における興味関心のあり方や、数学や医学など科学的な事項についても、中世人が何を知っていて何を知らなかったのかということを明らかにすることにつながるという見通しのもとに研究を遂行しようとしたものである。

3. 研究の方法

研究の具体的な方法としては、まず日本国内に所在する漢籍のうち中世に遡りうる書き入れのあるものの所在状況を把握することを行った。これは、書誌学・史料学の長年にわたる蓄積により、図書館等の所蔵機関や寺社におけるそれぞれの蔵書目録(冊子体もしくはデータベース)はおおむね整備されており、そこから書き入れの所在を示唆する記述をリストアップする作業を行った。また、こうした所在については、柳田征司氏の長年にわたる抄物所在調査の成果(『抄物の研究』1~22号、1970~2011年ほか)や玉村竹二氏の調査ノート(東京大学史料編纂所架蔵写真帳『南窓先生荷菱文庫蒐集史料』)に学ぶところも大きい。

これらの所在状況の把握を受けて、実際の史料調査を行った。申請時に調査先として想定していたのは図書館等の漢籍所蔵機関や五山系禅宗寺院であったが、本科研の研究期間中に上述の所在状況調査やその他の情報提供を受けた結果、それ以外の顕密系寺院における所蔵漢籍や、中小規模の禅宗寺院における蔵書などの調査を行うことができた。

4. 研究成果

(1)漢籍書き入れを中心とする史料調査と研究資源化

上述の目的と方法に基づき、本研究においては、研究期間7年間(新型コロナウイルス感染症の影響による2年間の期間延長を含む)を通じ、計48件の史料調査を行った。調査先は図書館等の各種所蔵機関、禅宗寺院を中心とした19箇所、調査対象としては書き入れを含む漢籍を中心としつつも、関連する様々な典籍・史料もあわせて調査を行った。

調査にあたっては、書誌学的手法に基づく調書を作成したほか、必要なものについてはデジタルカメラによる撮影を併せて行った。調査の概要については『東京大学史料編纂所報』の「史

料採訪報告」の項で報告し、可能なものについては目録も掲載した。また、撮影したデジタル画像については、所蔵者の承諾を得られたものについて、史料編纂所図書室において閲覧公開を行っている。

(2)漢籍書き入れに関する史料学的研究

これらの史料調査や研究資源化を踏まえて、具体的な漢籍やその周辺の典籍と書き入れをめぐる史料学的な研究を行った。

第一には、室町期の東福寺僧季弘大叙の日記『蔗軒日録』の古写本（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）の調査を通して、傍訓や朱点・朱引の主体を検討した。同書は記主季弘大叙の自筆本が現存しておらず、剛外令柔による写本が唯一の古写本として残るのみであるが、とくに傍訓と本文内容との関わりから、一部の傍訓については剛外令柔によって書写時に加えられたものではなく、季弘大叙の自筆本の段階から存在していたことが推定できることを考察した。また朱点・朱引の状況から、剛外令柔による季弘大叙の僧伝もしくは語録の編纂が企図されていた可能性があることも指摘した。『蔗軒日録』自体は漢籍ではないが、季弘大叙・剛外令柔ともに漢籍に親しく接した禅僧であり、その書き入れの手法や背景を検討することによって、「漢籍書き入れ」を日本中世史のなかで史料学的に位置づける第一歩となったものと考えられる。

第二には、史料編纂所所蔵『五岳疏藁』について、配列と朱点等を検討し、序文の省略や本文の分かち書きの形態とも併せて考察した。同書は中近世移行期の五山および大徳寺・妙心寺への入寺疏を年代順に収録したものであるが、編者は個々の疏の製作背景や僧の逸話には関心なく、ただひたすら四六文の形式にのみ関心をもって編まれたものと位置づけた。入寺疏を製作するインナーサークルへの新規参入と当該期の寺社・学問政策との関わりも併せて考察したが、書物への書き入れや配列の形式がこのような寺院社会の動向とも関連づけて理解しようという点でも貴重な事例と考えるものである。

このほか、大蟲宗岑の撰述にかかる『聞書』（仁和寺所蔵）、友雲斎安栖の撰述にかかる医書（『小倉家伝書』のうち）などについても調査を行い、それぞれ史料紹介を行った。

(3)中世の知識伝達をめぐる研究

史料調査およびそれに基づく史料学的研究により、「漢籍書き入れ」を日本中世史の史料として位置づけたことを受けて、実際の「漢籍書き入れ」の内容について検討し、とくに禅宗寺院における漢籍講義とそれに付随する知識伝達の様相について研究を行った。

具体的には、『史記』『周易』について行われた講義に着目し、その講義から生みだされた「漢籍書き入れ」や注釈書（抄物）の検討を行った。とくに、室町期の相国寺僧桃源瑞仙による『史記』講義からは、単なる中国史についての講義にとどまらず、たとえば室町幕府における守護出銭の先例などの政治・社会経済上の知識が伝達されていたことを明らかにした。また、同じく桃源瑞仙による『周易』講義においても、単なる儒書の講義にとどまらず、易の理解の基礎となる算木による計算方法などの数学的知識が伝達されていることを明らかにし、その合理的発想は当該期の禅僧に前代までの呪術的世界観を相対化する視点をも与えていることを考察した。これらの点については、本科研以前に採択された科学研究費若手研究(B)「中世禅宗寺院における農業知識に関する研究 抄物史料の活用を通して」(2012~2016年度)による成果とあわせて、川本慎自『中世禅宗の儒学学習と科学知識』(思文閣出版,2021年)として成果を公開した。

また、禅宗寺院における漢詩文作成に関連する諸史料の書き入れや注釈書のなかにも、建築物に関する知識が散見することにも着目し、禅僧の造営・土木知識の伝達についても考察した。禅宗寺院の建築実務については、禅宗寺院のなかで経営実務を担当した東班衆の職掌に含まれることから、寺院史・建築史の観点から研究が進められてきたが、本科研での研究においては、建築を構想する段階で必要となる意匠や構造の知識が漢籍講義のなかで伝達されていることを明らかにし、東山殿造営において実際の建築に反映されていく様相を考察した。この点については、近年の建築史学研究で前近代建築の様式概念の再検討がすすみ、たとえば「禅宗様」のようなひとまとまりの技術体系が存在しているわけではなく、細かな個別の技法・意匠がそれぞれ伝来・伝承されて、個々に建築物に用いられたり用いられなかったりする、という見解が示されている。本科研で明らかにした、漢籍講義において副次的に中国建築の意匠の知識が伝達されているという点は、こうした建築史学研究の成果を補強するものと考えている。この点については、川本慎自「中世禅僧と造営・土木知識」(『日本史研究』715,2022)にて包括的に考察したほか、東山殿造営の前後の時期の夢窓派における建築関係知識(室内装飾や石窟など)の集積について個別にいくつかの論文で検討を加えた。

以上の(1)~(3)の調査・研究から、「漢籍書き入れ」を日本中世史研究のなかで史料学的に位置づけるという当初の目的を果たし、中世禅宗寺院における漢籍講義と知識伝達の様相の一端を明らかにし得たものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 73-5
2. 論文標題 夢窓派と石窟の表象	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 275
2. 論文標題 室町仏教と唐物	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 84-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 2022-8
2. 論文標題 史料紹介 仁和寺所蔵『聞書』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究成果報告	6. 最初と最後の頁 221-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 892
2. 論文標題 口絵解説 『小倉家伝書』のうち「医学書 二冊 南陽之友雲斎書」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 715
2. 論文標題 中世禅僧と造営・土木知識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 46-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 263
2. 論文標題 夢窓派の応永期	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 19
2. 論文標題 『五岳疏藁』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 4
2. 論文標題 中世の学問と禅僧の儒学講義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山川歴史PRESS	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川本 慎自	4. 巻 867
2. 論文標題 書評と紹介 朝倉和著『絶海中津研究 人と作品とその周辺』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 104-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本 慎自	4. 巻 情報文化
2. 論文標題 寺社の記録、僧侶の史書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 郷土史大系	6. 最初と最後の頁 146-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本 慎自	4. 巻 情報文化
2. 論文標題 図書館の起源	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 郷土史大系	6. 最初と最後の頁 350-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本 慎自	4. 巻 61-1
2. 論文標題 中世禅僧の数学認識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 仏教史学研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本 慎白	4. 巻 86
2. 論文標題 新収史料 三會院主大義周敦等連署申状（慈聖院旧蔵）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 847
2. 論文標題 書評と紹介 田中尚子著『室町の学問と知の継承 移行期における正統への志向』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 104-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 -
2. 論文標題 桃源瑞仙と武家故実の周縁	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 前田雅之編『画期としての室町 政事・宗教・古典学』	6. 最初と最後の頁 123-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 -
2. 論文標題 室町文化と宗教	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高橋典幸・五味文彦編『中世史講義 院政期から戦国時代まで』	6. 最初と最後の頁 149-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 25
2. 論文標題 応安七年円覚寺火災と鎌倉山崎	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 舎人倶楽部会報	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 川本慎白
2. 発表標題 金仙寺の一切経と秩父の文化
3. 学会等名 鎌倉禅研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川本慎白
2. 発表標題 三国伝記と夢窓国師
3. 学会等名 鎌倉禅研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川本慎白
2. 発表標題 中世禅僧と造営・土木知識
3. 学会等名 日本史研究会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川本慎自
2. 発表標題 宋学与日本中世の禅宗寺院
3. 学会等名 光啓・東亜史学前沿（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川本慎自
2. 発表標題 千葉一族・臼井氏と五山文学
3. 学会等名 千葉市・千葉大学公開市民講座「千葉氏・禅宗・東アジア 中世房総をめぐる新たな視座」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川本 慎自
2. 発表標題 夢窓派の応永期
3. 学会等名 応永・永享期文化論研究会例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川本 慎自
2. 発表標題 禅宗と戦国時代の科学知識
3. 学会等名 鎌倉禅研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川本 慎自
2. 発表標題 中世禅僧の数学認識
3. 学会等名 佛教史学会学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川本 慎自
2. 発表標題 桃源瑞仙の周易講義と武家故実の周縁
3. 学会等名 寺院史研究会例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 前田育徳会尊経閣文庫編、末柄豊・川本慎自解説	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八木書店出版部	5. 総ページ数 272
3. 書名 尊経閣善本影印集成76 蔗軒日録・盲聾記	

1. 著者名 川本 慎自	4. 発行年 2021年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 中世禅宗の儒学学習と科学知識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------